

Title	M.S. Miller: The economic development of Russia.
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.10 (1926. 10) ,p.1350(148)- 1360(158)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19261001-0148">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19261001-0148</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

M. S. Miller. The Economic Development of Russia.

from 1905—1914. 8vo. pp. xviii. & 311.

1926. London.

支配者階級の利益と一般民衆の利益とが相離るゝことの甚だしきは露西亞に如くものはなかつた。露西亞文明は第九世紀より第十三世紀末まで榮えてゐた Novgorod 及び Kiev に始まる。Tatar の侵入に依つて北方に追はれ再び Moscow を中心として文明を形成し、その文明は第十七世紀末 Petrograd の新中心の生ずるまで繼續し、Petrograd の新文明は一九一七年大革命の勃發するまで續いてゐた。蠻族の支配に對する争闘がこゝに獨裁政治と奴隸制度とを生せしめたのは Moscow 時代であつた。従つて一般民衆に對し何等の基礎を置かない少數者に依つて支配され、國家はすべての經濟的活動に於いて決定的要素であつたのである。本書は世界大戦前二十年間の露西亞の經濟的發展の事實を正確に描くこと、及びすべての方面に於ける國家の勢力を跡づけ、その程度まで政府の行動と社會の發展との衝突に依つてそれ等の發展が影響されたかを發見せんとするのである。(二—五頁)

この目的を達せんがために著者は商業、財政、交通、産業の四綱目に分かち説明してゐるが、その前に緒論として地理的研究(地勢、人種、風土等)社會學的基本(社會階級、社會學說等の變遷)憲法改正等に就いて簡単な記述をなしてゐるのは蓋し讀者に親切なものであらうが、こゝでは餘りに紙數を増すことを恐れて省略する。(第一、第二章)直ちに本論に入り商業に就いて簡単に紹介しよう。

露西亞の貿易は一九〇二年から一二年までは一年平均三億三千萬留<sup>ルツル</sup>の利益を見、一九一一年の如きは四億二千九百萬留に上つてゐる。之に反して一九一三年には一億四千六百萬留に下り、一九一四年大戦開始と共に同年に一億四千百萬留、翌一五年には七億三千六百萬留の不足を示してゐる。この現象は輸出超過の漸次に増加しつゝあつた一八九四年から一九一二年に至る間と著しい對照をなすものである。元來露西亞の敗政的並びに經濟的安定を計らんがためには有利なる貿易状態を繼續することが必要であるか如何かに就いて學者間に多くの議論がある。Ullrich は全體の國の經濟的幸福に對して是はよい結果を齎さないと論じた。一八九三年から一九〇三年まで露國は輸出超過の状態にあり、是等を大藏大臣 Witte は二つの理由から經濟的繁榮に有利なりとしてゐる。即ち(一)工業的産物の輸出増加、(二)機械類輸入の減少、(三)從來外國より齎されし物の國內産業に依つて供給さるゝこと等である。然るに Dage は實際状態を觀察し、露國全體の經濟生活は農業に依存することを知り、次ぎの如く結論してゐる。有利なる貿易状態を維持する政策は唯農民の力に依つて行はれてゐるが、それ等の農民は最も富裕なる地方に於いても悲惨なる状態にある。保護貿易主義は農業の機械を高價ならしめ、農民は是を使用し得ず、加ふるに生活費の暴騰等は一層彼等を貧しくし、耕作意の如くならず、帝國が依存する農民を疲弊せしむると云ふのである。更にこの問題の他の論者は金本位維持から重要であると云つてゐる。是に對しても反對者があるが、(W. Fajans) 要するに政府の輸出超過維持の政策に對する反對には相當の理由があるのであつて、露國が農業國

として樹立する上に於いて必要と見たのであつた。

第十九世紀に於ける露國の關稅政策は大體三つの時期に分けられる。即ち(一)一八〇〇—二四年の禁止的關稅、(二)一八二四—七六年の禁止的關稅の緩和、(三)一八七六年以降の保護政策の再興である。大戰前數年間多少關稅の輕減を見なければ、それでさへ一九一二年には輸入品價格の三割と云ふ他に類のない高率であつた。

關稅問題に關し最も興味あるものは一八九四年の露獨商業條約である。その結果露國は最惠國條款を獲得し、その穀物も唯百瓦に三麻半の稅を拂ふこととなり、その代りに獨逸産原料品及び製造品の稅率を輕減し、特別稅を課する權利を廢棄した。然しこの條約制定前の兩國の關稅戰の激烈だつたことは最も有名である。又この條約の結果は獨逸の農業に依つて有害と考へられた。同條約締結の當時露國は農業國として有利な地位にあつたのであるが、一九〇四年條約が改正された時には幾多の戰爭の結果窮境にあり、露國の穀類に稅率を増され不利なる地位に立つた。(第三章)

元來露西亞の輸出は穀類、特に小麥がその主要なもので、第二十世紀の二十年間全體の平均四割八分を占めてゐた。是等の餘剩穀物は永い間主として露國の中部諸州から産出されてゐた。然るに一八九一年の不作以來その重要さを減じ、南部諸州が急激に生産率を増加して來た。然し露國の農業はその耕作法に於いても生産率に於いても是を他の國々に比して遙かに劣つてゐるのみならず、是を販賣するに當つて多數の仲介商人あり、外國市場に於いて比較的高價なものになつて不利益の地位にあつた。穀物以外の輸出にはその他の食料品、家禽、稅關公表の區別に従へば「原料品、半製品」の類、材木、セメント、鐵その他の金屬類であつて、製造品は殆ど云ふに足りない。その一々の説明はこゝには省略する。

輸入は大戰前數年急激に増加したが、その増加の主要なる部分は原料品と製造品とであるが、その三分の二は獨逸から輸入される製造品の増加である。この増加は一方國內市場の消費能力の増大を示すものであるが、他方さらに少しく注意を拂へば國內に於いて産出し得る商品であるとの不公平も一理あるものである。是等の輸入に關し、上記の如く獨逸が英國よりも遙かに優越なる所以は獨逸商業の極めて組織的なることを示すものであらう。(第四章)

次に金融方面に關し著者は先づ銀行に關して述べてゐる。一八六〇年以前には主なる銀行業務は古い政府銀行の手にあつたが、同年廢止され露國々有銀行の設立を見た。その後の銀行業務の狀態を觀察すると大體三種類の信用機關が存在してゐる。即ち國有の信用機關、(一)中央國有銀行、(二)國有貯蓄銀行、(三)土地銀行(社會的信用機關(都市銀行等)、個人的信用機關(株式會社商業銀行等)である。是等の一々の説明に就いて著者は長文の一章(二十五頁)を宛てゝるが、こゝには省略する。唯かくの如き信用機關殊に個人的銀行の發達と共に、こゝに外國資本の流入を生じ一般に愛國的感情が是等の發展に反對する傾向さへ生じてゐたことを注意するに止める。(第五章)

露國貨幣制度を諒解する上には一八九七年の改革を知る必要がある。それ以前にあつては銀貨留を以つて基本としてゐたが、その後金貨本位を採用することになつた。それに關し種々なる困難や非難を免かれなかつたが、殊に金貨を國內に保留するための種々なる保護政策は國民經濟によくない影響を興へた。日露戰役その他の結果として國內の金銀は漸次に減少し、之に反して中央銀行の紙幣發行は同じ程度に増加した。尤もこの現象は露國ばかりでなく歐洲全體を通じてさうであつて、一九一〇年のメキシコ恐慌の惹起するまでは國內流通は銀行紙幣のみにて足れりと云ふ説さへ生じた。

露國の財政制度を知る上に特に露國は他の歐洲諸國と政治的にも經濟的にも異なることを知らなければならぬ。即ち經濟的には極めて後れ、産業革命を適用する用意すら缺如してゐたこと、政治的にはすでに他の國々に於いて民主的傾向が生じてゐたにも拘らず、未だ獨裁政治の堅城であつたことである。一七六九年に始まり第十九世紀の中頃迄の露國々債は主として戦争と内亂との結果であり、その以後の増加は鐵道の建設に原因した。然るに一九〇五年の日露戦役及びそれに續く内亂はその結果の財政を極度に紊亂してしまひ、露國の全負債は十億磅に上り、公債だけでも八億磅に達した。國債には長期、短期、隨時買戻の三種あつたが、それ等の中幾何が外國の資本に基いたかに就いては種々なる議論がある。然し無記名公債の半ば以上は國內に於いて所有されたこと推定し得よう。然らば外國債は何處の市場に於いてなされたかと云ふに、勿論その時の事情に従つて區々ではあるが、初期のものは主として和蘭及び伊太利の銀行に依つてなされた。第十九世紀に至ると漸次に富裕になつた獨逸から獲得した。英國が是に參加するやうになつたのは一九〇七年兩國間の協成成立の後である。(第六章)

一八六二年の豫算改革は奴隷解放に續く一般的改革運動の一部である。翌六三年以後は新基礎に基くものであつて、その後絶えず歳出歳入共に増加してゐる。先づ歳入に就いて述べれば、第一に直接税を擧げなければならぬ。その中に包含されるものは私有土地に課せられる地租、都市に於ける家屋税、波蘭の都市村落に於ける爐税 (hearth tax) Transcaasian 諸州等に於ける天幕税 (Kibitka) 國有地の永久借地人に對する賃料、住宅税、商業及び工業税、資本利子税等であつたが、その中商工業税の急速なる増加は露國の産業化を指示するものである。さらに所得税及び相続税に依つて直接税の増收を計つたが一九一四年の大戦勃發と共に廢棄されてしまつた。

間接税は酒精類、煙草、砂糖等一般消費物に課せられたから、人口の増加、都市人口の集注、交通機關の改良と共に増收を見た。間接税の中には關稅收入をも包含する。その外國庫の收入を形成するものには印紙税、登録税、通行税等の諸税 (duties)。鑛山、鑄貨、郵便、電信、電話の諸收入並びに酒類專賣の收入を包含する特許税 (Royalties)。さらに國家に屬する財産及び基金等からの收入があつた。

歳出に就いても同じく年々増加の傾向を有したが、(一)一般行政、(二)國債、(三)軍事費、(四)生産諸費用、(五)國家事業の項目の中(三)と(四)とが最も著しい増加を示してゐる。今是等の特種なる費用に關する一例を見るに一九〇三年より一三年までの間に四百億留以上に達してゐる。即ち次ぎの如し。

日露戰爭費	一一、二四二萬留
鐵道建設費	七六三
同 買上費	三二
その他の鐵道費	九一
港灣建設費	二四
國防費	四五五
支那及び波斯遠征費	二〇
期日前の國債償還費	一九九
凶作に依る費用	四〇三
雜費	四七
合計	四、四七六

(註) 日露戰爭費はそれに基づく國債を合算すれば三、〇一六百萬留となる

日露戦争費を暫く除くとするも平常に於いてもかくの如き巨額の金額が "free balance" として議會の承認を要せざることは、假令國防その他の國家發展の費用に供せらるゝとするも、なほ濫費の恐が少なくない。種々なる議論の生ずることは止むを得ないことであらう。又他方露國の租税制度に對し弾力性の缺如せること等の攻撃を聞くのであるが、元來露國は租税負擔能力の最も強き中産階級極めて少なく到底緊急の國家の必要に應ずることの出来ない缺陷がある。著者はさらに地方行政の機關たる Zemstvos に就いて述べ、それと中央政府との衝突を論じ、又都市財政に就いて説明し、都市の公債が内外の市場に於いて増加してゐるのは都市の發展に基くものとしてゐるが、それ等に就いては多く紹介せず置く。(第七章)

次に著者は交通の方法に就いて「道路と水路、船舶」の一章と「鐵道」の一章を設けてゐる。先づ前者に就いて簡單に紹介しよう。露國は交通機關に就いても困難なる事情が多い。廣大なる領土、散在せる少數の人口、又國內に於ける石、砂利等の不足は道路建設に非常な困難を來たした。唯冬季氷雪を以つて蓋はるゝに至り、こゝに自然的な自由な道路を現出するが、春と秋とは是等の道路は殆ど通行不可能な程の泥濘に變化する。露西亞の南部が生産地方であるのに對して北部は消費地方であり、こゝに交通問題に特殊の意義を生ずる。單に社會的産業的發展に適當な道路が必要であるのみならず、人民の生活そのものにすでに不可缺のものであつた。古い制度に依れば道路は(一)主道(二)大道(三)郵便道(四)商業及び地方道(五)田舎道或は田圃道及び馬道の五つに分れ、第一のものは國家が責任を負ひ、第二、第三及び第四は地方官より成る委員會が是に當り、第四は自治團又は地主が修繕等を行ふ。一八六四年には Zemstvos が組織され農奴の強制労働に依つて修築を行なつた。實際百姓は貧乏であるから、物資提供よりも勞力提供の方を喜んだ。然し是等の方法も道

路橋梁の維持に不十分であつたことは云ふまでもない。

水路の第一である河川に就いて露西亞は天然の恩恵を受けてゐた。歐羅巴に於ける Volga, Don, Dnieper, Bug, Dvina, Priester, Vistula, Nieman 等、亞細亞に於ける Ob, Enessei, Lena 等すべて航行し得る長い範圍を有してゐた。然し露西亞人の是等を利用することは甚だ不十分であり、又氣候風土が非常な妨げをなした。是等の河口に築港計畫を行ふやうになつたのは一九〇五年以後であつたが、大戰前までには著しい進歩を見なかつた。然し運河の開鑿は是等の河川を連結し經濟上重要な價值を有してゐた。

大戰前までには露西亞は船舶業に於いて成功してゐなかつた。外國貿易の大部分が外國船舶に依存することは甚大なる損失であつた。従つて政府は造船に力を盡し補助を與へたが著しい進歩を見ず、外國から購入する方が割安であつた。是等の供給者としては英蘭が第一位を占め、獨逸、瑞典これに次いだ。又船舶機械器具の類も外國の供給を仰いだ。(第八章)

露國政府は極力鐵道の建設に努力し、この廣大なる帝國の連絡を完成せんとした。鐵道建設以來私設會社の經營の困難、莫大なる損失は次第に國有鐵道を以つて有利とする傾向を生じた。一八八二年より一九一一年に至る鐵道建設の狀態は Dr. Metens の計算に従へば次ぎの如くである。

一八八二—六年	四、〇三九(アスト)	一八、七(アセント)
一八八七—九一年	三、二二七	一一、六
一八九二—六年	八、三七〇	二九、一
一八九七—一九〇一年	一四、七五八	三九、七
一九〇二—六年(2)	六、三四八	一一、二
一九〇七—一一年	三、三九九	五、八

- (1) Verst はわが約三千五百尺  
(2) 一九〇二年以降建設に差圖の生じたのは日露戦役及びそれに續く内亂に依り財政の困難を招來したためである。

現世紀の始めに於いて商工業の發達と共に物資運輸の必要は一層緊急となつた。政府が如何に是等の鐵道政策を行なつたか、又如何なる財政状態であつたかは興味ある問題ではあるが、こゝには省略する。唯到底鐵道に依る負債が鐵道に依る純收入に依つては返済し得なかつたことは次ぎの計算に依つて明かである。鐵道に依る支出及び収入は建設費を除いて一九一二年には次ぎの如くであつた。即ち支出五千六百萬磅に對し収入七千二百萬磅で、大體千六百萬磅の純利益を擧げ得た。然し政府が鐵道の債務として負ふてゐる額は一九〇八年に於いてすでに總計五億磅と算定される。若し平均利率四分五厘と見れば、この利子二千二百五十萬磅、結局不足六百五十萬磅と云ふわけである。然し露國のこの状態は一九〇八年以前に於いて一層甚だしく、その以後收入激増し、次第に改善に向ひつゝ、終に大戰時に至つたのである。(第九章)

最後に産業の發達に就いて述ぶるに當つて著者は先づ製造業と採取業とに分ち、第十章に於いて産業發達の地方、資本家階級、労働者階級、労働運動、資本連合、工場法等を述べ、第十一章に於いて製造業の概観、砂糖酒類、綿花、鐵等を論じてゐる。採取業に就いては第十二章に於いて鑛山及び冶金に就いて、第十三章に於いて漁業と森林に就いてそれぞれ論じてゐる。今こゝにそれ等に就いて一々紹介する豫定であつたが、到底紙數の餘裕がないから、次ぎに著者自らが結論に於いて概括するところを紹介するに止める。

産業は要するにその起源を國家の創設に發見する。又その發展も一に政府の保護の下にあつた。唯織物業及びある程度まで精糖業が私人的企業として發達し、多少とも國家の統制から獨立してゐる。

た。産業發展が露國の經濟的獨立を目的とする國家の政策の一部であつた。然し社會的發展は産業の發達と相伴はなかつた、中流階級の發達が十分でなく一國の經濟的構造に産業の完全なる同化を行ふことが出来なかつたのである。産業は上から與へられたものとして外のものであつた。綿花、砂糖、冶金工業の如き外國で購入するより高價に於いたので、一般民衆は産業を負擔とさへ見るに至り、少しも是が發展を希望しなかつた。

又労働者の立場から見ても同様であつた。彼等は依然として百姓であつて、彼等の土地によしそれが小さくとも執著し、雇主の利益のためにのみ存するやうに思はれる工場を嫌惡した。少數の熟練職工のみが産業のために働いたのであるが、全體に影響するには餘りに少數であつた。

かくして著者は次ぎのやうに結論してゐる。一九〇五年から一四年までの露國の經濟的發展を研究した結果はすべての經濟的活動に於いて國家が著しい役目を直接經營者として行なつてゐたことを知つた。かくの如き状態が多くの不利益を生ずることは明瞭である。露國の如き廣大なる帝國に於いて單なる行政事務を行ふのすら政府として非常に困難であるのに、それに加ふるにかくの如き企業を行ふは政府を徒らに困亂せしむるのみである。又政府の行動が人民の感情の到達し得ざる點まで行き過ぎると云ふ危険が絶えず生ずる。即ち政府は經濟的抱負に於いて第二十世紀であつたが、是等の抱負は寧ろ殆ど第十六世紀の状態にあつた政治的方面、同じく後れてゐる人民に向けらるべきであつた。その結果として政府のみ獨り經濟政策に於いて將來に向つて投機した。露西亞の無限なる富は結局鐵道や産業は利益を擧げるに相違ないであらう。然し過程は長期の平和的發展を要求した。露國は日露戦争及び一九〇五年の内亂を経た後さうした時期にはいつたやうに思はれた。然し大戰は是を妨げた。政治的方面に於いても同様であつた。等しくさらに多くの年月を要すべきもの

が、大戦のために早められたのである。而してこゝではソヴェット政府の研究はこの書の範圍に入らない。然し著者は最後にソヴェット政府が前政府と同一困難に陥りはしないかと云ふ疑ひを抱いてゐる。

以上大體の紹介を終つたのであるが、少しく蕪雜で十分に意を盡し得なかつたことは讀者の寛恕を乞ふ次第である。本書が各編の終りに参考の統計その他を附したこと、卷末に参考書目を擧げてあること等は讀者に親切である。一言こゝに附加して置きたいことは近頃「經濟的發展」とか或ひは「經濟的文明史」等の名稱の下に所謂社會の經濟的事實を並列する傾向がある。本書の如きもその一つである。例へば財政に關する事項の如きは恐らく財政史に入るべきものであらう。かくの如く廣義に一般に經濟的事項を並べたものも「經濟史」と呼ぶべきか、又「經濟發展」と稱すべきか否やの問題は恐らく各人の趣意に依つて相違することであらう。然し唯本書の如く餘りに各々の技術的敘述に力を注ぐことは却つて一般の經濟的發展を明かにする上に不得策であると思ふ。寧ろ技術的方面、例へば鐵道に關する事項の一部の如きは交通史に入るゝを以つて適當と考へる。なほ經濟史そのものゝ性質、意義に關しては他日述ぶる機會があることと思ふ。唯標題の意義よりして一言したのみであつて、深く非難したわけではない。(一九二六、九、一九)

野村兼太郎

## 價值論に關する最近の二文獻

- (1) K. Diel—Von der sterbenden Wertlehre. (Schmollers Jahrbuch. 49 Jahrgang.)
- (2) C. Turgeon—Contribution à l'histoire contemporaine des doctrines économiques. 1925.

價值論は今や危殆に瀕しつゝある。價值論上の從來の論争は主としてその實質的内容に關するものであつたが、近時の論争は寧ろ價值論そのものゝ存否に關するものである。この時に當つて獨佛二碩學の價值否定論と價值中心論とを紹介する事は強ち徒爾では無からう。

(1) Cassel, Dietzel, Liefmann, Gottl の如き現代學界の雄が何れも有力なる價值否定論を提唱し Diel 亦之に多分の賛意を表する一事は價值論の危機を知らしむるに充分である。Diel の如上の「瀕死の價值論」なる論文は右四氏の主張と之に對する自己の批判を陳敘せるものであつて、この問題に關する出色の好文字と言つて差支へが無い。

Cassel, Dietzel の兩氏は價格論を以て價值論に代えんとし、略々類似の見解を持つるものであるが、之に就ては既に小泉教授の詳論せられた所であるから、此處に繰返す事を避ける(本誌、三月號 價值論の價值、參照)。唯注意すべきは Cassel は交換經濟を貨幣經濟と解し、「財貨の價值」は畢竟「財貨の價格」に外ならずと斷言し乍ら、「貨幣の價值」をば依然として認容しつゝある一事である。氏は價格の原因を生産手段の稀少性(Knappheit der Produktionsmittel)と需要の状態(Beschaffenheit der Nachfrage)とに求めたるが爲、價格概念には貨幣概念が内包されてゐない。交換經濟の下に於ては